HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	解離発症に及ぼす心的イメージの影響［全文の要約］
Author(s)	本間, 美紀
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第11508号
Issue Date	2014-09-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/57271
Type	doctoral thesis
File Information	Miki_Honma_summary.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

解離発症に及ぼす心的イメージの影響

本間　美紀

精神医療の現場では，解離性障害の患者は，現実と見紛うほどの知覚的詳細さを伴ったリアルなイメージを体験するという事例が多く観察されている。そうした事実は，イメージが解離の発症と何らかの関連があることを示唆する。実際，解離理論の中には，解離性同一性障害という典型的な解離の病理を持つ患者が，異なる複数の人格状態を発展させていく過程には，リアルなイメージを体験する個人の傾向が関与していると主張するものもある。しかし，両者の関係を調べた実証的研究からは，そのような仮説を支持するような一貫した結果は必ずしも得られておらず，未だイメージの関与を想定しない解離理論も多い。解離理論をより精緻なものにするためには，さらなる実証的検討を行い，解離とイメージとの関連についてより明確にする必要がある。

本論文では，解離とイメージとの関連性を解明するため，以下の２つの問題について検討を行った。第１は，ある場面のイメージを形成した際，それをリアルに体験することと，解離傾向の高さが関連しているか否かという問題であり，第２は，イメージ体験が精神医療の対象となるような病的解離と関連している否かという問題である。第２の問題は治療的介入の一環として検討し得る。しかし，第１の問題は解離の基礎過程の研究であるため治療とは直接の関係がなく，アナログ研究を行わざるを得ない。そこで先ず，解離症状を有する精神科外来に通院中の患者（臨床群）と，非臨床群の解離体験構造，具体的には解離性体験尺度の構造の同型性の確認を行った。この結果を受け，臨床群と非臨床群の解離体験に質的差異はないと仮定し，第１の問題の検討を行っている。

第１の課題，すなわち，解離とリアルなイメージ体験との関連性の解明に当たっては，類知覚的側面や情動的側面等，リアリティの発現に関与するイメージ体験の複数の側面を区別して検討することが有用である。そこで，本論文では，イメージ体験を類知覚的側面と，その他の側面とに大別した上で，解離傾向の高さとの関連について検討を行った。第２の問題は，解離性体験尺度の下位因子のうち，リアルなイメージ体験と密接な関係にある「没入」因子が，しばしば非病的な解離と見なされることを受けて設定された。解離性体験尺度による病的解離の検出力が，「没入」以外の因子に由来するものであれば，リアルなイメージ体験と病的解離との関連を否定する根拠となりうる。ただし，「没入」因子が非病的であるという通説は，十分なデータに基づいたものではない。そこで，ミネソタ多面人格目録によって測られる，解離性障害に特徴的な精神症状との関連を通じて，病的解離の検出に寄与する下位因子の同定を試みた。各章の概要を以下に記す。

第１章では，解離概念の整理を行い，解離の諸理論について概観した上で，心的イメージが，解離性同一性障害患者においてみられるような，異なる人格状態が発展していく過程にどのように関与し得るか，その可能性について理論的な検討を行った。さらに，解離とイメージの関連についての先行知見を概観し，臨床報告と実証的研究の不一致を解消するための方法論を提案した。

第２章では，臨床群と非臨床群の解離体験に連続性があるか否かを検討するため，解離症状を有する精神科外来通院中の患者（臨床群，研究１），および大学生・専門学校生（非臨床群，研究２）の解離性体験尺度の因子構造の検討を行った。結果は，両群とも，解離性体験尺度には「自動化」「没入」「離人と非現実感」の３つの下位因子が存在すること，並びに因子間の関係も同一であることを示していた。この結果は，非臨床群を調査対象者として解離現象のアナログ研究を行うことの妥当性を支持するものであると考察した。

第３章では，イメージの類知覚的側面についての定量的検討（研究３），および，その他の側面

についての定性的検討（研究４）という２つの方向から，解離傾向とリアルなイメージ体験との関連性について検討を行った。研究３では，イメージの類知覚的側面におけるリアリティを測定するために新たに構成された質問紙について，その因子構造を確認したところ，「視覚的明瞭さ」「視覚以外の感覚モダリティの明瞭さ」「統御性」の３つの下位因子が見出された。その上で，それらの３つの因子から構成されるリアリティの高さが，解離傾向と有意に関連していることが示された。研究４では，イメージの類知覚的側面以外の性質について，テキストマイニングの手法を用いて検討を行った。その結果，高解離群においては，ネガティブなイメージ，および人が居ない場面のイメージを形成する人が多いことが明らかになった。こうした結果は，抑うつ感情や対人不安といった高解離群の心理状態が，イメージの内容に反映されたものと考えられ，それも高解離群のイメージ形成過程の特徴であると解釈している。

第４章では，イメージ体験と病的解離との関連を探るため，臨床群を対象として，研究１で得られた解離性体験尺度の３つの下位因子と，ミネソタ多面人格目録の諸尺度との関連を調べた（研究５）。その結果，解離性障害の患者に特徴的な多くの精神病理と最も強い相関がみられたのは，解離性体験尺度のうち，リアルなイメージ体験に関連した「没入」因子であった。この結果は，「没入」因子は非病的な解離であるという通説に反するものであり，イメージが病的解離と関係しているという仮説を支持するものと考えられた。なお，「離人と非現実感」因子も「没入」因子に準ずる形で解離の病理と関連しており，これら２つの因子が解離の病理に重要な役割を果たしていることが示唆された。

第５章では，一連の研究結果の総括を行い，そこから導かれる解離発症のメカニズムに関して議論した。先ず，解離とイメージとの関連が示されたことを受けて，イメージは解離の発症に寄与する要因の一つであり，イメージをリアルに体験する傾向が高いほど，精緻で自律性のある異なる人格状態が形成されるという仮説が支持されたと結論づけた。続いて，異なる人格状態の形成が，離人感や解離性同一性障害といった病的状態を生み出す過程について説明を試みた。最後に，得られた知見がどのように臨床場面に寄与し得るかを考察し，残された問題点，および，さらなる検証を行うための方法論上の改善点について述べた。